

平成25年度 児童・生徒の平和に関する図画・作文コンクール

＜審査委員一同＞

作文の部 <講評>

今年度は、作文の部で小学校から44編、中学校から17編、合計61編の応募であった。厳正に審査した結果、小学生は、村長賞1名、教育長賞3名、優秀賞5名、入選6名が受賞した。また、中学生は、村長賞1名、教育長賞2名、優秀賞3名、入選3名が受賞した。

この「児童・生徒の平和に関する図画・作文コンクール」は、第1に「歴史の実相を次の世代へ正しく継承し、平和を尊ぶ心を育てること」、第2に「作文を書くという創作活動により、平和メッセージを発信する」という2つの趣旨で実施されている。

戦後68年の星霜を重ねた今、戦争体験者が高齢になり、「語り部」の方々も漸少し、歴史の実相を伝承することが懸念される状況にある。このコンクールが、「平和行政推進事業」として企画された意義は大きく、作文の内容にもその趣旨が生かされ、児童・生徒の平和を希求する思いが伝わる作品が多かった。さらに、指導課題のひとつと言われている「表現力」の育成に資する貴重な機会となったことも高く評価したい。

作文審査については、内容を重視し、表現方法、学年の発達段階等も考慮しつつ、慎重かつ丁寧に審査し、下記のとおり講評する。

- 1……小学生村長賞、小淵喜羽さんは、昨年につき2年連続の村長賞受賞となった。沖縄陸軍病院南風原壕軍20号で体験感受したことを、「ちょっとこわそうだな」と書き出し、コトバが力まないうで、大人の言葉を自分の見る力、聞く力として表現している。祖父母と一緒に戦争体験し、暗い「壕」で繰り広げられたことを、自分の胸の中の声として、「明日も、あさっても、平和のにじでつなげるといいな」と発信しているすばらしい作品である。
- 2……①小学生教育長賞、阿波根恭花さんの作文は、会話するコトバを使ったしっかりした表現になっている。「へいわの紙ひこうき」を通して、弟とのせんそうについての会話をえがおとともに世界に発信している。
②小学生教育長賞、島袋愛子さんの作文は、3つの題材「平和学習」「つしま丸」「絵本」から反戦平和の思いを書いた優れた内容で、最後に「人が人でなくなる戦争」というフレーズ的な表現でまとめている。
③小学生教育長賞、松田暉礼さんの作文は、「平和祈念資料館」、読谷村の「ガマ」を見学し、戦争のさまざまな無笑映像と、今の平和な自分の生活とを「笑顔」で重ね合わせて文章構成した優れた作品となっている。
- 3……中学生村長賞、比嘉七奈子さんの作文は、ひめゆり学徒の祖母、ハワイ捕虜生活をした祖父、祖父が語った鉄血勤皇隊の祖父の弟のことを聞いて、自分で考え、言葉の後ろにある悲惨さを表現した、結論が明確な力強い作品となっている。祖父母に対する思いやり、感受性豊かな作者の「戦争は人の気持ちを麻痺させた」という言葉が読者の気持ちにずん！と入り込んでくる。
- 4……①中学生教育長賞、盛根秋葉さんの作文は、言葉の仕入れ先が戦争体験者で、日常性が68年前の遠き昔のこととはいえ、「肉を食いちぎる」という強烈なリアリティーな表現により、語ることを始めた体験者の居ずまいを意識した言葉を意図的に使っている。現今の憲法改正、長崎、広島と核兵器など政治の動向にも思いを馳せ、憲法第9条は「日本の宝」として、平和と戦争について語り継ぐことを強く心に刻んでいる。
②中学生教育長賞、比嘉美憂さんの作文は、まず、小学生から平和学習をしてきた中で、作者と同年世代の戦争に対する意識が希薄化していることを危惧し、戦争の実相を語り継ぐ決意を改にしている。集団自決に関して、当時の天皇に命をささげる考え方について可否の自答をし、時系列で考えると、「できない」と自分の考えを明確に表現した中学生らしい優れた作品となっている。
- 5……応募者は、平和学習で学んだことを通して作文に綴っているのが多かった。作品の内容は、平和の尊さや命の大切さが綴ってあり、その思いが読み手に伝わってきた。児童生徒の平和への関心度と意識の高さを感じることができた。
- 6……原稿用紙の使い方は改善されたが、誤字・脱字等の点検、文章の校正を丁寧に指導する等、基本をさらに大切にしたい。
- 7……中学校の作文の中には、授業で学んだ資料内容の列挙のみになり、自分の意見が弱い作品も多々あった。特に、中学校においては、受賞歴は高校入試の内申点として合否に影響を及ぼすので教科内外で取り組みを強化したい。村史、各字誌も資料の視野の一つにしたい。
- 8……本事業への応募には、学校間や学年間の偏りがあり、校内審査を含めて取組態勢の工夫が求められる。学校の担当者を選出し、学年間の分掌担当者を決め、このコンクールを通して「表現力」「思考力」を伸ばし、言語感覚を磨き、伝え合う力を高めたい。